

書評

玉木俊明『拡大するヨーロッパ世界 1415-1914』、  
知泉書館、2018年11月。

坂野 健自

1.

本書は2018年11月に知泉書館から出版された経済史の専門書である。ヨーロッパがどのようにして経済発展を遂げ、イスラーム世界やアジアに進出し、世界経済を支配することができたのかについて明らかにした著書である。

著者の玉木俊明氏は、京都産業大学経済学部教授でヨーロッパ経済史の専門家として勤務しており、経済史に関する専門書や翻訳本を多く刊行しているほか、近年は一般の読者に対してわかりやすい経済史の著書も目立つ。

本書は序章、七つの各章、二つの補論、そして結語から構成される。その内容は多岐にわたるが、詳細に立ち入る前に各章のタイトルを列挙しておきたい。

序章

第一章、小さなヨーロッパから大きなヨーロッパへ

第二章、北海・バルト海・地中海経済圏の統合

第三章、大西洋経済の形成

補論Ⅰ、プロト工業化とは何だったのか

第四章、商業情報の中心アムステルダム

第五章、重商主義社会から帝国主義時代へー数量化・可視化傾向がもたらした変化

第六章、アジア・太平洋とヨーロッパ

補論Ⅱ、ディアスポラの経済史ーアルメニア人・セファルディムとヨーロッパ経済の拡大

第七章、世界を変えたイギリス帝国と情報ー蒸気船と電信

結語

内容として最初はヨーロッパの地理的事情からはじまり、時期の経過とともにヨーロッパ勢力が拡大し、最終的にイギリスのヘゲモニーへと至ったことが読み取れる。続いて、序論・結語を含めた各章の内容をまとめてみたい。

まず冒頭で、著者の目的が19世紀のヨーロッパ、とりわけイギリスがなぜ世界を支配できたのかについて経済面から解答を得ることであると明示された。

「序論」ではヨーロッパ世界の優位が19世紀だけにも関わらず、世界史に大きなインパクトを与えたことをしっかりと受け止めるべきであると考え、主にヨーロッパとアジアとの経済成長の比較に関する研究史の体系的な整理及び批判をしている。

まず、ケネス・ポメランツの大分岐論争<sup>1</sup>を扱い、ポメランツの後の研究もヤン・ライテン・ファン・ザンデン、グレゴリー・クラーク、プラサナン・パルタサラティ、ペール・フリースらの研究に触れている。ファン・ザンデンは、ヨーロッパの書物の出版点数がアジアより多かった点に着眼し、グレゴリー・クラークは、経済制度や文化的価値観により優秀な労働者が現れたことに、プラサナン・パルタサラティは、イギリスのインド綿織物市場での競争、ペール・フリースは重商主義を基盤とした経済政策について注目した。

しかしながら、著者はこれらの研究は一つの指標を作り、その観点からその事柄を論じる傾向があるという。例えば、ポメランツはイギリスでは石炭が利用できたが、中国の長江流域では石炭が利用できなかったという点だけで「グローバル」を論じているとし、著者はそのような比較に対して警鐘を鳴らした。

そこで著者は、18世紀半ば以前はアジアの方がヨーロッパより経済成長率が高かった可能性を示唆し、大分岐論を経済的にヨーロッパがアジアに追い付き追い抜く長期的な過程であると結論づけた。そのヨーロッパの経済成長で大きな役割を果たしたものとして三点を挙げている。

一つ目が「情報」である。これまでの大塚久雄や川北稔らの研究は具体的なモノ、すなわち有形財の研究が主流であったが、著者は情報を含めた「無形財」の研究を重要視した。情報の非対称性が少ない社会は、個人が市場に参入しやすくなり、ダグラス・ノースのいう取引コストが低下し、大きな経済成長をもたらす<sup>2</sup>。そのような社会がヨーロッパで誕生したからこそヨーロッパ経済が世界経済をリードするようになったという。

二つ目が「海運業」である。著者はウォーラステインの近代世界システムでは第一次産品輸出地域を工業国が搾取するという構図があるが、どこの国が商品を輸送したのか目を向けていないと批判した。ヨーロッパは様々な海上ルートで様々な地域と結びつき、ネットワークを構築して、流通網を形成し商品を自国船で輸送した。その一方、アジアはヨーロッパの海上まで進出していない。このヨーロッパの海運業発達こそがヨーロッパとアジアとの間に大きな違いを生み出したのだと主張した。

三つ目が「構造的権力」<sup>3</sup>である。著者は構造的権力を持つ国は世界の政治経済のルール

---

<sup>1</sup> ポメランツ (2015)。ポメランツは18世紀半ばまでの西欧とアジアは「驚くほど似ていた、ひとつの世界」であったとし、経済発展の度合いに差がほぼないとし、西欧で石炭の利用と大西洋世界の開発がなされたことによって西欧とアジアとの間に大きな分岐ができたと捉えた。

<sup>2</sup> 経済学では情報の非対称性が大きいと市場の機能が損なわれ、市場の失敗が起きるとされている。例えば、商品に関する情報を多く有する売り手とほぼ有しない買い手との間には、買い手が商品の取引を拒否する可能性もある。

<sup>3</sup> イギリスのスーザン・ストレンジの用語。ゲームのルールを決め、それを強制できる国家を指す。

を決めることができ、それはまたヘゲモニー国家の特徴であると考えている。著者は、16世紀のオランダはヨーロッパ内でヘゲモニー国家となり、19世紀後半から第一次世界大戦のイギリスは世界中で覇権を握ったと捉えた。

第一章「小さなヨーロッパから大きなヨーロッパへ」では、古代ギリシアから長い時を経てヨーロッパが海上ルートで進出したことを記述している。中世のヨーロッパは、あくまでイスラームの巨大な商業圏の一部に過ぎなかったが、アフリカの金を求めてポルトガルが海上に進出し、大航海時代が到来した。さらに、オランダやイギリスも進出するようになり、各地を植民地化していった。

第二章「北海・バルト海・地中海経済圏の統合」では、ヨーロッパ内部の三つの海の経済圏がいかにして統合されていったかについて焦点を当てた。中世においてはイタリアが香辛料貿易によりヨーロッパの先進地域であったが、森林資源が枯渇し、イタリアで造船業・海運業が停滞すると、木材資源が豊富な北方ヨーロッパ世界の船舶が地中海に進出するようになった。また、地中海で穀物不足が生じ、北海・バルト海沿岸から北方ヨーロッパ船での穀物輸送が起こった。そのようにして、北海・バルト海の船舶、とりわけオランダ船が地中海に押し寄せ、地中海経済圏は北海・バルト海経済圏に飲み込まれるかたちで統合された。

第三章「大西洋経済の形成」では、ヨーロッパが大西洋をヨーロッパ人の内海にした過程について描かれた。著者によると、大西洋は広大であり開拓にはコストも膨大であるので、国家による保護が重要であったという。そして、国家による保護で大きな進展が見られたのがイギリスであり、最終的にフランス革命・ナポレオン戦争によってフランスとの争いに勝利し、ヘゲモニー国家へと上り詰めたのである。

補論 I 「プロト工業化とは何だったのか」においては、かつて歴史学で流行ったプロト工業化について説明し、プロト工業化の問題点を近世ヨーロッパにおける国際的貿易の拡大の面から指摘した。

第四章「商業情報の中心アムステルダム」では、アントウェルペン商人のディアスポラ<sup>4</sup>によってヨーロッパで情報の非対称性が少ない商業空間が誕生したこと、また17世紀にオランダのヘゲモニーによって発展し、同質的な商業空間がヨーロッパ全体で拡大したことをまとめた。

その際に、アントウェルペン商人が各地に移住したことによりそのノウハウがヨーロッパ各地に伝播し、さらには私的商人ネットワークが構築されたこと、ゲーテンベルク革命により「商売の手引」など商人のマニュアル本が作成され、同質的な商業情報が共有されたことを重要視している。そして、各地の商業情報が集まったのがアムステルダムであり、オランダはヨーロッパで同質的な商業空間の拡大に寄与した。

第五章「重商主義社会から帝国主義時代へ―数量化・可視化傾向がもたらした変化」では、重商主義の時代に政治算術など国家社会のあり方を可能な限り数量化する傾向が起こ

---

<sup>4</sup> 16世紀にスペイン軍によってアントウェルペンが陥落し商人が各地に移住した出来事。

り、決済システムの発展や労働時間の可視化、余暇の誕生などヨーロッパ、特にイギリス社会に及ぼした影響について言及している。これまではヨーロッパ経済発展の外生的な要因が中心であったが、この章では内生的な要因が扱われ、さらに外生的要因といかんにして関係していたのかが扱われた。イギリスでは市場が発展し家庭内での労働時間を減らす代わりに市場での労働時間を増やし、新世界の砂糖やコーヒーなどの消費財を購入していったと主張し、ヨーロッパの内生的発展がヨーロッパの対外進出と関係していたことを明らかにした。

第六章「アジア・太平洋とヨーロッパ」では、ヨーロッパのアジア・太平洋進出がテーマとなっている。まず大航海時代を先駆けたポルトガル商人が進出し、アジアと大西洋を結合し異文化間交易の中心となり、さらにはイギリス・オランダが加わり、東インド会社設立など国家の後押しを受けた活動をした。ポルトガル商人の役割は縮小したものの、彼らは英蘭東インド会社と協同するなど国家の枠組みと関係なく動いていた。イギリスのヘゲモニー完成前の重商主義の時代では商人と国家が共棲関係にあったという。

補論Ⅱ「ディアスポラの経済史—アルメニア人・セファルディムとヨーロッパ経済の拡大」では、ディアスポラを「みずからの意思ではなく宗教的理由から強制的に移住させられる」という意味として捉え、イベリア半島から追放されたセファルディムと中東で活躍していたアルメニア人をディアスポラの民とし、ディアスポラによってユグノーの商業ネットワークが各地に拡大し、東インド会社との商業面での連携などによりヨーロッパの対外的進出へ影響したと述べた。

第七章「世界を変えたイギリス帝国と情報—蒸気船と電信」では、イギリスのヘゲモニー完成について述べている。ポルトガルは強力な経済力があつたわけではなく、オランダはあくまでヨーロッパ内部での情報の拠点として支配的であつたに過ぎなかった。しかし、イギリスは世界全体で情報の拠点として支配的であり、国家がヘゲモニー完成に大きく関与した。イギリスのヘゲモニー完成に大きな役割を果たしたのが、海運業の発展である。19世紀後半になると蒸気船が盛んに使用されるようになり、海上保険も発展した。さらにイギリスを中心に世界中に電信網が敷設された。このような海運業ネットワークや電信の敷設などは、それまでのヨーロッパの対外進出で構築された貿易ルートをそのまま利用していた。

19世紀のイギリスでは海運業の利益、保険や電信のサービスからの収入が増加し、さらにロンドンでの金融市場が発展し、ロイズが世界最大の海上保険組織となった。そのようにして、イギリスは手数料で膨大な利益を得る「手数料資本主義」を構築した。それがイギリスのヘゲモニーの大きな特徴であつたという。

結語において著書の研究をまとめている。中世においてヨーロッパはイスラームの経済圏の一部に過ぎなかったが、近世にアムステルダムを中心に同質的な商業空間ができ、また数量化と労働時間の増加が見られていた。この時代にヨーロッパはヨーロッパ船で大西洋・アジアに進出していき、各地に商人ネットワークが構築された。近代においてはイギ

リスが国家の保護のもと蒸気船での輸送、海上保険、電信の発展によって世界の商業情報の中心となり、手数料で大きな利益を得る「手数料資本主義」を構築した。ただ、イギリスの海運業のネットワークや電信の敷設はそれまでのヨーロッパの対外進出の際に形成された貿易ルートをそのまま利用していた。

つまり、イギリスは長期にわたるヨーロッパの対外進出の成果を最終的に手にして、世界全体のヘゲモニー国家になったと結論付けた。

## 2.

以上で本書の内容をまとめた。以下では本書の批評を行いたい。本書の扱う研究対象が膨大なことから、この研究には多くの時間をかけてきたことが伺える。元々、著者の研究対象は近世バルト海貿易であり、2008年にはその研究の集大成ともいえる『北方ヨーロッパの商業と経済』(知泉書館、2008年)を出した。その内容は本書の第二章でも取り上げられたが、本書の内容の多くは『北方ヨーロッパの商業と経済』の出版後に研究されたと思われる。

この10年間の間に、著者の研究対象は近代バルト海貿易史から「世界経済史」と表現できるほどの内容に変化した。『近代ヨーロッパの形成—商人と国家の近代世界システム』(創元社、2012年)においては、既にアントウェルペン商人のディアスポラからイギリスの電信の敷設について述べられており、本書の内容の骨格が生み出されたと考えられる。

さらに『ヨーロッパ覇権史』(ちくま新書、2015年)では大西洋貿易のみならずヨーロッパのアジア進出にも着眼し、近代ヨーロッパのアジア進出等が現代社会にも影響を及ぼしていることにも言及した。その後『〈情報〉帝国の興亡—ソフトパワーの五〇〇年史』(講談社現代新書、2016年)で、情報という無形財をツールにオランダ・イギリス・アメリカが世界にまたがるヘゲモニー国家を完成させたことについて取り扱った。

そして、2016年以降に『先生も知らない世界史』(日経プレミアシリーズ、2016年)、『逆転の世界史—覇権争奪の5000年』(日本経済新聞出版社、2018年)など「世界史」という名のついたタイトル通り、これまでの著者の膨大な研究を軸に世界全体の経済史を対象とした作品を生み出した。そのような中で、刊行されたのが本書である。本書は著者の様々な研究を基盤に、膨大な先行研究を参考にしつつ、経済学の知識を用いて、情報という無形財の視点から「世界経済史」を解き明かした作品である。つまり、『北方ヨーロッパの商業と経済』刊行後の10年間におよぶ著者の研究の集大成ともいえる。

まず、本書の大きく評価できる点を述べていきたい。第一に、ヨーロッパが拡大したプロセスを広大かつ長期的な面から解き明かした点である。本書は南極大陸を除く世界全体をカバーしており、また中世からさかのぼって近代ヨーロッパの拡大の要因を探っている。近代ヨーロッパが経済成長したことについて取り扱った書物は多数存在するが、これほど膨大な事柄を扱った書物は決して多くない。さらに、中世・イスラーム世界の発展の時期から大航海時代・オランダのヘゲモニーを経てイギリスが世界のヘゲモニー国家とな

ったプロセスを主に情報という観点を中心にまとめた著者の視点には感服するばかりである。

第二に、欧米の最新の研究を幅広くカバーしているという点も評価に値する。序論では、ポメラントの「大分岐論」からポメラント以後の研究を紹介・批判したほか、各章でも膨大な先行研究を把握したうえで論じている。

最後に、バルト海貿易史での基本的なデータベースの史料 STR-Online<sup>5</sup>、大西洋奴隷貿易のデータベース<sup>6</sup>など近年盛んになりつつあるデータベースを用いた研究を行っているという点も評価できる。このことは情報社会における新たな歴史研究として注目に値する。

一方で、いくつか腑に落ちない点も存在する。第一に、ウォーラーステインの世界システム論という半辺境国への言及が少ないと思われた点である。ポルトガルやスウェーデン<sup>7</sup>の動向については第二章や第六章で高く評価されていて決して半辺境国を無視しているわけではないが、一方でスペインやフランスもヨーロッパ外世界に進出し、広大な地域を支配したのも事実である。とりわけフランスは、イギリスのヘゲモニーへ大きな影響を与えた国家である。なかには、フランス革命とナポレオン戦争によって英仏対立に決着がつき、イギリスのヘゲモニーが確立したというパトリック・オブライエンの解釈もある<sup>8</sup>。フランスも新世界やアジアなどへ盛んに対外進出した国であり、ヨーロッパの対外的進出の歴史を扱う際には避けては通れない国である。イギリスのヘゲモニー獲得やヨーロッパの対外的進出について扱う手前、フランス、スペインをより多く扱うとより良質な内容になったと思われる。

第二に、移民についての記述が少ない点である。第四章でアントウェルペン商人について詳しく言及したものの、商人以外では補論Ⅱの箇所でアルメニア人・セファルディムについて述べたくらいで商人に大きく偏っていると感じた。ただしこの点については、本書の刊行後にあたる2019年2月に『世界史を「移民」で読み解く』（NHK出版新書、2019年）が出版され、著者自身も今後移民について詳細な研究を展開していくと思われる。今後の研究に期待したい。

第三に、「手数料資本主義」の記述について内容自体は非常に興味深いものの、根拠については具体性に欠けるという点である。手数料によってイギリスは膨大な利益を得たとあるが、一体どのくらいの利益があったのか、また手数料がどの地域からどのくらい入っていたのかについてはあまり説明がされていない。イギリスのヘゲモニーの時代は世界中がイギリスと結びついていた。例えば、日本も開国後にイギリスが最大の貿易相手国となり強い関係があった<sup>9</sup>。日本からどれくらいの手数料がイギリスに流れ、結果的にイギリスの

<sup>5</sup> <http://www.soundtoll.nl/index.php/en/> また、STR-Online を用いた研究として、坂野、玉木（2017）などがある。

<sup>6</sup> <https://www.slavevoyages.org/assessment/estimates>

<sup>7</sup> 中立国スウェーデンの経済動向については、Müller（2004）などの研究もある。

<sup>8</sup> O'Brien（2011）。

<sup>9</sup> 浜野、井奥他（2017）、pp.90-93。

経済成長に貢献したのかが明らかになれば、それは新しい視点に立った斬新な研究となる。 「手数料資本主義」は、著者も重要視している概念であると思われ、また結論に大きく関わるために、具体性に乏しいことは非常に惜しく感じるが、この点は今後の研究の課題とも言えよう。

最後に、現代への影響についてもあまり触れられていない点である。イギリスのヘゲモニーは現代へも影響を及ぼしているという記述がほかの著書の一部では見られたが<sup>10</sup>、本書では少ない。対象とする時期を1914年までとしていることもあるが、現代からの視点も含まれていたらより良質なものとなったと思われる。

このような問題点が存在するものの、本書は膨大な研究を基にイギリスがヘゲモニーを獲得したのは、「ヨーロッパの対外的進出の成果を最終的に獲得した」ためというシンプルながらも納得のいく結論を導きだしたことは大きく評価できる。さらにイギリスのヘゲモニーをめぐる問題を取り扱うことは、今日の世界貿易問題の研究やイギリスのEU離脱問題を論じるにあたって多くの示唆を与えてくれるとも言えよう。本書は歴史書、経済学書であると同時に現代の様々な問題への解決のヒントを与えてくれる書物である。

ところで、著者の勤務校である京都産業大学は「むすんで、うみだす」を掲げ、様々なものを結ぶ拠点を目指している大学である。著者は世界中の様々な研究を結び付け、オリジナリティあふれる業績を多数生み出していることから、私は著者こそ「むすんで、うみだす」ことを実践している研究者だと考える。今後の著者のさらなる活躍を願いつつ、書評を終えたい<sup>11</sup>。

#### 《参考文献》

- 坂野健自, 玉木俊明 (2017年) 「近世ストックホルムの貿易 1721~1815年—「二層貿易」の展開と崩壊」, 玉木俊明, 川分圭子編『商業と異文化の接触—結合される世界の経済』, 吉田書店.
- 玉木俊明 (2018年) 『ヨーロッパ繁栄の19世紀史—消費社会・植民地・グローバリゼーション』ちくま新書.
- 浜野潔、井奥成彦、中村宗悦、岸田真、永江雅和、牛島利明 (2017年) 『日本経済史 1600—2015 歴史に読む現代』慶應義塾大学出版会.
- ポメラントツ, ケネス, 川北稔監訳 (2015年) 『大分岐—中国、ヨーロッパ、そして近代経済の形成』名古屋大学出版会.
- Müller, Leos (2004), *Consuls, Corsairs, and Commerce. The Swedish Consular Service and Long-distance Shipping, 1720-1815*, Uppsala.

<sup>10</sup> 例えば、玉木 (2018)、終章。

<sup>11</sup> なお、本書の刊行後にあたる2019年2月に『世界史を「移民」で読み解く』(NHK出版新書、2019年)、7月に『衰退しない国家 逆転のイギリス史—辺境の島国から覇権国家へ』(日本経済新聞出版社、2019年)が出版された。今後も多くの研究が生み出されると思われる。

O'Brien, Patrick Karl (2011), "The Contributions of Warfare with Revolutionary and Napoleonic France to the Consolidation and Progress of the British Industrial Revolution", Working Paper 150/11, London School of Economics.

《参考電子資料》

STR Online

<http://www.soundtoll.nl/index.php/en/>

Trans-Atlantic Slave Trade – Estimates

<https://www.slavevoyages.org/assessment/estimates>